

日本ブロンテ協会関西支部 2024年大会プログラム

場所： 神戸海星女子学院大学 1404教室
(〒657-0805 兵庫県神戸市灘区青谷町2丁目7-1 阪急電鉄神戸線「六甲」駅下車
バス約15分)

日時： 2024年3月29日 (金) 13:00~16:00

司会： 山内理恵 (神戸市看護大学教授)

開会挨拶： (13:00~13:05)

開会の辞： 奥村真紀 (日本ブロンテ協会関西支部支部長・京都教育大学教授)

会長挨拶： 栗栖美知子 (日本ブロンテ協会会長・大東文化大学名誉教授)

研究発表： (13:05~14:05)

1. 翻訳者たちの『嵐が丘』

行田英弘
(北海道大学大学院博士後期課程1年)

2. 『ヴァイレット』における旧市街の表象

山本菜々美
(日本大学非常勤講師)

講演： (14:30~15:30)

イングランド演劇における異性装と女優

岩田美喜 (立教大学教授)

総会： (15:30~15:40)

閉会の辞： 清水伊津代 (日本ブロンテ協会関西支部顧問・元近畿大学教授)

日本ブロンテ協会関西支部事務局

〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1 大阪工業大学 工学部総合人間学系教室 瀧川宏樹研究室内

TEL: 06-6167-5191 E-mail: bronte.kansai@gmail.com

1. 翻訳者たちの『嵐が丘』

行田英弘

(北海道大学大学院文学院博士後期課程1年)

文芸批評の場において、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-1848) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) の作品解釈は、これまで「諸々の批評方法の特徴をいびつなまでに反映しつつ、めまぐるしく変化してきている」(廣野由美子『謎解き「嵐が丘」』, p.16)。他方、翻訳に目を向けると、本作は1932年の初訳以来、連綿と日本語に翻訳され続けているが、これらの邦訳があらわす作品解釈もまた、同様に多様な変化を見せてきたのだろうか。

本発表ではこの問いに、歴代の『嵐が丘』邦訳者たちが記した「あとがき」や作品について論じたエッセイなど、翻訳の「周辺テキスト(paratext)」を読み解くことで取り組む。特に、各訳者が抱くエミリー像がうかがえる箇所や、作品の主題への言及箇所を比較することで、翻訳者たちの作品解釈の異同や変遷を跡付けたい。なお、扱う訳本は抄訳・翻案を除く全訳に限ることとし、同一の訳者による改訳がある場合は、初訳のみを分析の対象とする。

2. 『ヴィレット』における旧市街の表象

山本菜々美

(日本大学非常勤講師)

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の『ヴィレット』 (*Villette*, 1853) は、主人公ルーシー・スノウが異国の架空国家ラバスクール王国において教師生活を送る物語である。“Labassecour”への言及は作品中26回されているが、ルーシーがポール・エマニュエルとの関係性を深める中で、彼女が王国の「歴史」について語る際にこの言葉が頻発する事は注目に値する。特に、旧市街の街並みやそこに住むヴァルヴァラン夫人の屋敷は「過去の繁栄」として表象されており、ラバスクールという歴史的背景がもたらす物理的、心理的意味が内包されている。本発表では19世紀ベルギー史やシャーロットのベルギー留学体験に関する日記との関連性も踏まえながら、旧市街の表象が作品中の登場人物との関係性にどのような意味をもたらしていたのかを探る。